

北方四島ビザなし交流

土谷 貴史

1 全般

初めて上陸した時の印象は複雑でした。日本固有の領土なのに「こういう形でしか上陸できない」という敗戦の傷跡に戸惑うのは私一人ではないと思います。

国後島に上陸して感じたことは、島が予想していたより大きくまだ自然が残されています。島民は日本人に親しみを感じているのか、小さな子供が「こんにちは」と挨拶します。「クリル発展計画」の成果が、道路の舗装、幼稚園及び病院の新設、地熱発電による電気設備等として見え始めたせいか、島民の顔に余裕すら感じられます。

行政府の幹部の言葉の端はしには、「メドベージェフ首相自らが視察に来るぐらいこの島は中央が重視しており我々は見捨てられてはいなかった。」と言わんばかりの横柄な態度でした。それはとりもなおさず、1992年のビザなし交流が始まった頃の「日本の領土になった方が良い。モスクワから見放された」と嘆く島民の声ではなく、「ここはロシアの領土、寸土たりとも日本には返還しない」と言い切るメドベージェフ（7月4日国後島視察時の発言）の自信に満ちた顔とダブッてしまい「もはや領土返還はありえないのか」と自問自答せざるを得ませんでした。

2 北方四島のロシア化

今回の訪問で、舗装された道路、送電設備の整備、街路灯の整備、派手な色彩の家や近代的な幼稚園の視察を通じ、「クリル発展計画」による四島の着実なロシア化を確認できました。またギドロストイ社という民間資本の投資が進み、水産加工場やサケマス孵化場が地域の雇用に貢献し、同社が運営する保養温泉施設は島民に生活の豊かさを実感させる憩いの場になっているのも確認できました。

しかし昭和30年代の日本を見ているようだと感じたのは私1人ではないと思います。市街地以外の道路は相変わらず車の通行で土煙に覆われ、道路も2～3年でやり直すことになりそうな簡易舗装でした。択捉の内岡湾の整備に韓国企業が進出（日本の重機を使って）していましたが、日本は閣議

了解で「四島への日本人の立ち入りを自粛している」ため企業の進出はありません。

今後、北方四島への韓国、中国、北朝鮮等の進出が更に進むでしょうが、ただ手をこまねいていて良いのでしょうか？四島の潜在主権をロシアと議論しながら共同管理方式による漁業資源管理、環境汚染対策等のノウハウを持つ企業が進出できる環境を造り、それらの民間交流の中から領土返還につながる道を探るといった妙案はないのでしょうか。

3 北方四島の価値と返還運動のあり方

冷戦時代における北方四島の価値は、米軍原潜の閉め出しとオホーツク内海化という安保面での価値が大きかったわけですが、地球温暖化や経済のグローバル化が四島の価値を変えつつあります。北極海航路が見直され、スエズ運河航路の2/3の燃料と時間で欧州とアジアを結ぶ。アジアの積荷をウラジオから宗谷・津軽海峡を経て千島列島、更ベーリング海峡から北極海に運ぶルートです。ここに目をつけたプーチン・メドベージェフ体制はクリル発展計画で四島のロシア化を推進しつつあり、今後12年は続くであろうプーチン政権は、昨年3月「ヒキワケ」「ハジメ」の提唱で、最悪2島返還、できれば現状固定で領土問題に幕を引こうとする可能性があります。「プーチンは柔道を愛し、嘉納治五郎を崇拝する親日家であり、娘も日本語を勉強する。また安いシェールガスの出現の中でLNGガスの有望市場として日本を見ている。そんな所に領土交渉の糸口があるのかも知れない。」と今回一緒に訪問した名越拓大教授が話していました。四島の経済が豊かになればなるほど領土返還が遠のくというジレンマを抱え、今後返還運動をどのようにすべきか答えに窮しますが、民間レベルの信頼醸成を基に政治レベルの粘り強い交渉が必要と思います。